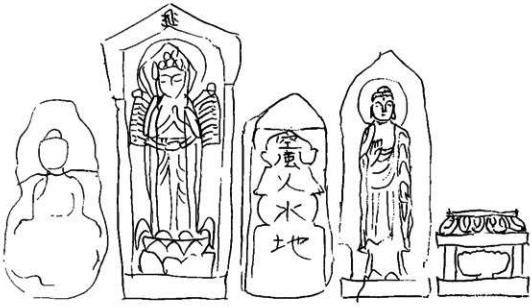
高岡市埋蔵文化財調査概報第44冊

# 国吉・石堤地区の遺跡調査概報

―昭和63年度、円通庵遺跡・末窯跡の調査他―




1999年3月

高岡市教育委員会

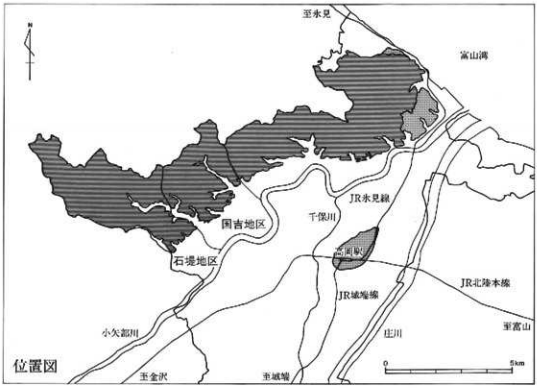
## 例　　言

1．本書は、富山県高岡市の国吉地区、石堤地区に所在する塚つかの遺跡の調査にかかる概要報告書である。
2．当調査は高岡市教育委員会社会教育課（当時）及び同文化財課（現在）が実施した。
3．現地調査及び基礎整理は昭和63年度に実施した。
4．報告書作成は平成10年度に実施した。
5．調査関係者は次のとおりである。

昭和63年度　社会教育課長：上田七郎
文化係長：河合甚郎
係員：山口辰一

平成10年度　文化財課長：宮村勝博
［埋蔵文化財係］
主幹兼係長：石浦正雄
係員：山口辰一、根津明義
荒井　隆、太田治司

6．現地調査及び報告書作成に当たり、下記の各氏及び機関より、御指導、御協力を得た。
（順不同、敬称略）
京田良志、高岡徹、西井龍儀、水上信好
宮田進一、邑本順亮、山川正隆、山森昌真
高岡市立西広谷小学校
7．図版８－１、９、11、12の写真については、京田良志氏から提供を受けた。
8．本書の装幀は山口が担当した。




※表紙・大扉カット＝円通庵遺跡等の石仏・石塔の素描（原図、京田良志氏）

# 目　　次

例　言
目　次

Ⅰ　序　説 …… 1

Ⅱ　国吉地区の遺跡 …… 5
1．釈迦堂遺跡 …… 5
2．円通庵遺跡 …… 5
3．江道出土の金銅仏 …… 6
4．笹八口砦跡 …… 7
5．境久寺遺跡 …… 7

Ⅲ　石堤地区の遺跡 …… 8
1．柴野の地蔵塚 …… 8
2．柴野の観音石仏 …… 8
3．柴野宇善寺遺跡 …… 9
4．末窯跡 …… 9
5．西広谷小学校の長頸瓶 …… 12

Ⅳ　結　語 …… 13

## 挿　図　目　次

第1図　遺跡位置図（1／5万） …… 1
第2図　遺跡地図［1］西広谷周辺地区（1／1万5千） …… 2
第3図　遺跡地図［2］笹八口周辺地区（1／1万5千） …… 3
第4図　江道出土の金銅仏実測図（実大） …… 6
第5図　西広谷小学校の長頸瓶実測図（1／3） …… 12
第6図　西広谷小学校の長頸瓶 …… 12

# 図　面　目　次


図面1　遺物実測図　境久寺遺跡　土器類
図面2　遺物実測図　境久寺遺跡　石製品・石器
図面3　遺物実測図　末窯跡　須恵器
図面4　遺物実測図　末窯跡　須恵器
図面5　遺物実測図　末窯跡　須恵器
図面6　遺物実測図　末窯跡　須恵器
図面7　遺物実測図　末窯跡　須恵器
図面8　遺物実測図　末窯跡　須恵器
図面9　遺物実測図　末窯跡　須恵器
図面10　遺物実測図　末窯跡　須恵器


# 図　版　目　次


図版1　遺跡　1．円通庵遺跡
　　2．円通庵遺跡
図版2　遺物　1．江道出土の金銅仏、側面
　　2．江道出土の金銅仏、正面
図版3　遺跡　1．笹八口周辺
　　2．笹八口周辺
図版4　遺跡　1．釈迦堂遺跡
　　2．釈迦堂遺跡
図版5　遺跡　1．釈迦堂遺跡
　　2．釈迦堂遺跡
図版6　遺跡　1．円通庵遺跡
　　2．円通庵遺跡
図版7　遺跡　1．円通庵遺跡
　　2．円通庵遺跡
図版8　遺跡　1．円通庵遺跡
　　2．円通庵遺跡
図版9　遺跡　1．円通庵遺跡
　　2．円通庵遺跡
図版10　遺跡　1．柴野の地蔵塚
　　2．柴野の地蔵塚
図版11　遺跡　1．柴野の観音石仏
　　2．柴野の観音石仏
図版12　遺跡　1．柴野の観音石仏
　　2．柴野の観音石仏
図版13　遺跡　1．末窯跡
　　2．末窯跡
図版14　遺跡　1．調査風景
　　2．調査風景
図版15　遺物　1．江道出土の金銅仏
　　2．江道出土の金銅仏、台座付
図版16　遺物　1．境久寺遺跡出土土器類
　　2．境久寺遺跡出土土器類
図版17　遺物　末窯跡出土須恵器
図版18　遺物　1．末窯跡出土須恵器
　　2．末窯跡出土須恵器
図版19　遺物　1．末窯跡出土須恵器
　　2．末窯跡出土須恵器
図版20　遺物　1．末窯跡出土須恵器
　　2．末窯跡出土須恵器
図版21　遺物　1．末窯跡出土須恵器
　　2．末窯跡出土須恵器
図版22　遺物　1．末窯跡出土須恵器
　　2．末窯跡出土須恵器

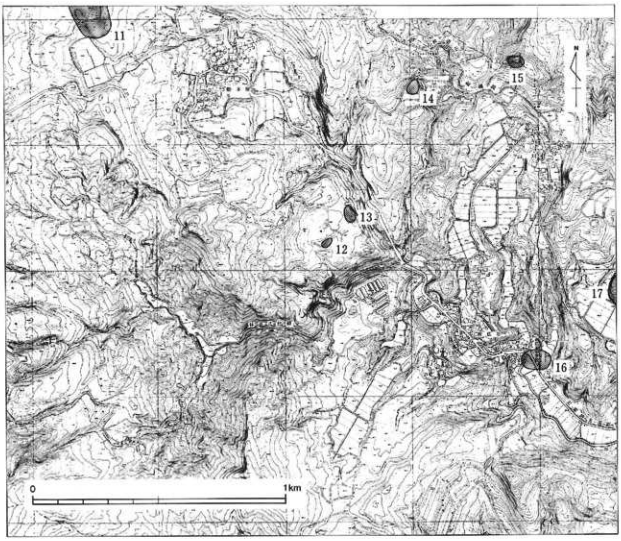
# Ⅰ 序　説

**国吉・石堤地区の概観**

高岡市の西端部に位置するのが国吉地区と石堤地区、かつての国吉村と石堤村の地域である。この地域は北西側が丘陵性の山地となり、南東側が平野部で小矢部川までの拡がりである。高岡市域における小矢部川左岸域の中でも上流域である。古代の郡界では、国吉・石堤地区は射水郡域であり、ここより下流域側は射水郡に該当する。

**第1図　遺跡位置図（1／5万）**

A－西広谷周辺（第2図参照）、B－笹八口周辺（第3図参照）




**第２図　遺跡地図［１］西広谷周辺地区（１／１万５千）**

11．勝木原オジャラ遺跡、12．末窟跡、13．梅野遺跡、14．苅賀野遺跡、15．山川経塚、16．西広谷遺跡、17．大寺Ａ遺跡

高岡市の北西部に位置するのが一般的に西山と呼ばれている丘陵である。この西山丘陵の東北東～西北西に走る尾根筋はさらに北西方に位置する氷見市との行政界となっている。

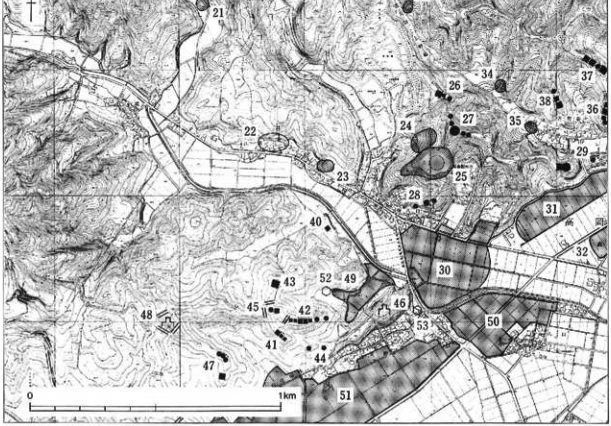
この丘陵を開析して中小河川が南東方向に流れ小矢部川へと注いでいる。これらの河川の一つが広谷川である。この広谷川が丘陵部から離れ平野部へ出る付近には、左岸に笹八口集落が右岸に柴野集落が位置している。左岸すなわち北東側が国吉地区であり右岸すなわち南西側が石堤地区である。広谷川が形成した谷間の平野部には、上流側へ向かって、五十辺、江道、境の各集落が続いている。広谷川中流域の左岸であり、旧国吉村に属する地域である。さらに丘陵側の奥へ暫く辿り山間に至ると西広谷集落に達する。この集落の北側に山川、北西側に勝木原の各集落がある。この３集落は旧石堤村の一部を構成していたものである。

**広谷川流域の遺跡**

勝木原地内は広谷川の最上流域である。ここには２つの縄文遺跡、勝木原オジャラ遺跡と勝木原宮ノ前遺跡がある。勝木原オジャラ遺跡は集落の北西側の丘陵上にあり、昭和39・40年に高岡工芸高等学校地理歴史

クラブにより発掘調査された。縄文時代後期～晩期の遺跡である。勝木原宮ノ前遺跡は集落の1.5km程西側にある。福岡町から小矢部市側へ流れ小矢部川へ流れ込む子撫川の最上流域に当たる。縄文時代中期～後期の遺跡である。

勝木原集落から広谷川を1.5km程下れば西広谷集落へ至る。集落の500～700m程北西側には２つの縄文遺跡、大寺Ａ遺跡、大寺Ｂ遺跡がある。西広谷地内にはこの他に、末窯跡、柴野遺跡、西広谷遺跡が所在している。柴野遺跡は遺物散布地であり、西広谷遺跡は以前に磨製石斧が採集されている。西広谷集落の北側の山川集落には、ここの北側白山社背後の山頂に山川経塚が所在している。また北西側に利賀野遺跡がある。




**第３図　遺跡地図［２］笹八口周辺地区（１／１万５千）**

21. 境久寺遺跡、22. 江道横穴墓群、23. 円通庵遺跡、24. 釈迦堂遺跡、25. 篠八口磐跡、26. 釈迦堂古墳群、27. 男撫古墳群、28. 笹八口古墳群、29. 立山古墳群、30. 笹八口遺跡、31. 宮田遺跡、32. 高辻遺跡、33. 月野谷石鏃遺跡、34. 月野谷干草遺跡、35. 月野谷大谷内遺跡、36. 道ヶ谷内Ⅰ古墳群、37. 道ヶ谷内Ⅱ古墳群、38. 道ヶ谷内Ⅲ古墳群、39. 鴻ヶ谷Ⅱ遺跡、40. 柴野春日古墳、41. 柴野口割Ⅰ古墳群、42. 柴野口割Ⅱ古墳群、43. 柴野口割Ⅲ古墳群、44. 柴野口割Ⅳ古墳群、45. 柴野城ヶ平城跡、46. 柴野高ノ宮城跡、47. 駒生谷殿谷内古墳群、48. 麻生谷殿谷内城跡、49. 柴野守善寺遺跡、50. 八口遺跡、51. 柴野遺跡
（52. 柴野の観音石仏、53. 柴野の地蔵塚）

この遺跡は昭和56年に発掘調査され、平安時代の土師器、須恵器が出土している。北東側の尾根筋には三千坊山がある。この付近には、二ッ城跡（三千坊山古戦場跡）や三千坊明後谷遺跡が所在している。三千坊明後谷遺跡からは、珠洲が出土している。

西広谷集落から広谷川を下れば中流域とも言うべき谷間の平野が拡がる。1.5km程の所に境集落があり、この地内の広谷川の支谷に境久寺遺跡がある。さらに下った江道地内左岸の丘陵腹部には江道横穴墓群が営まれている。この横穴墓群は昭和31年と平成8年に発掘調査されている。20基の横穴墓から構成されている7世紀代の横穴墓群である。江道地内には円通庵遺跡もある。

左岸域では下流側に五十辺・笹八口集落が位置する。集落の直ぐ山側に釈迦堂古墳群があり、背後の丘陵上には、笹八口谷内古墳群、男撰古墳群がある。近くには篠八口砦跡や釈迦堂遺跡も位置している。一方右岸側、柴野集落背後には、柴野春日古墳、柴野口割Ⅰ～Ⅳ古墳群の古墳群、柴野城ヶ平城跡、柴野高ノ宮城跡の城跡がある。広谷川に臨む支谷には、柴野の観音石仏があり付近には柴野守善寺遺跡が拡がっている。

広谷川が平野部へ出る左岸一帯が笹八口遺跡である。川岸に接する所から北側の丘陵裾部まで拡がっており、時期的には古墳時代から中世に至る遺跡である。ここの対岸の右岸域には八口遺跡が拡がっている。笹八口遺跡と同様に古墳時代から中世に至る遺跡である。広谷川が平野部へ出る右岸側、丘陵の南東側に接するように柴野集落がある。この集落の南側一帯が柴野遺跡である。奈良～平安時代を中心に弥生時代末～古墳時代、中世の遺物も出土している。またこの遺跡の一部が柴野の地蔵塚である。

**調査経過**

昭和62年11月14日に、国吉地区の笹八口遺跡で試掘調査を実施した。これは農地転用に伴うもので結果的には遺構・遺物の出土はなかった。この時地元の山森昌真氏らに近くの釈迦堂遺跡や円通庵遺跡等を案内してもらい、これらについての調査の必要性の話がでた。その後、山森氏らは当時の高岡市教育委員会の文化財主管課である社会教育課へ改めて調査を依頼された。

昭和63年11月23日に至りようやく実施の運びとなった。この調査は発掘調査ではなく、現地踏査を中心とする一般調査である。この時の調査は、山森氏をはじめとする地元の人が数名と、京田良志、西井龍儀、高岡徹氏の各研究者が主要なメンバーで、社会教育課からは山口が参加した。

高岡市の西都地域で、小矢部川左岸一帯の西山地区（西山丘陵とその周辺の平野部）は、多くの遺跡の所在地として知られてきた。高岡市教育委員会ではこの地区に対して「西山丘陵埋蔵文化財分布調査事業」として、分布調査を実施した。昭和58年度には守山・国吉地区北端部で、昭和59年度には北端部と南端部を除く国吉地区で、昭和60年度には石堤地区と国吉地区南端部で実施した。この結果は『西山丘陵埋蔵文化財分布調査概報』Ⅰ～Ⅲとして報告し、一応は遺跡の分布状態が把握された地区であった。しかし不十分な点もあり、上記の調査はこれを補う面もあった。

昭和63年11月23日の調査は、丘陵部と平野部が接する笹八口周辺を対象とするものであった。その後まもなくして山森氏をはじめ関係者から、西広谷小学校に所蔵されている考古資料の整理を依頼された。笹八口から約2.5km程谷に沿って丘陵の奥へ進んだ所が石堤地区の西広谷である。ここの大字西広谷、山川、勝木原を学区とするのがこの小学校である。校舎の改築を機に展示ケースを用意したので、資料を整理した上で展示をしてほしいとのことであった。この資料は未察跡出土品が主要なものであった。

このようなことを経て、昭和63年12月から平成元年2月にかけては、現地調査と小学校所蔵資料の整理作業を実施した。小学校への展示は2月28日に実施した。その後これらは、基礎整理を終えたままになっていたが、今度平成10年度事業として報告書を作成することになった。

# Ⅱ　国吉地区の遺跡

## 1．釈迦堂遺跡

丘陵の中腹、釈迦堂と呼ばれている所に位置している。当地に石龕内に阿弥陀仏（石仏）１躯と石塔がある。これらの石龕・石仏等は、現在地の北東約３ｍの所にあったが、38豪雪の時に崩壊したので、現在地に移されたものである。また現在当地の南側に八幡社が存在する。平成時代に入り覆屋が作られ、このなかに納まっている。石仏は南北朝時代末～室町時代初頃のものである。石龕は江戸時代のもので切妻造り平入りとなっている。願主・石工・年紀が記されている。願主は判読できないが、今後できる可能性もある。石工は「石工井波・・・」と銘記されている。年紀は「延享３年８月18日・・・」となり、1746年に製作されたことが判明する。石塔は、五輪塔、宝篋印塔、層塔であり、鎌倉時代末～室町時代初頃のものである。

阿弥陀仏は八幡社と結び付き、この石仏が八幡社の本地仏であった可能性がある。石龕は元々石仏を内部に安置するために製作されたかどうかは不明である。石龕が直接石仏と関係がない場合、中に神体を入れる神殿として製作され使用された可能性がある。石龕が神体とした場合、八幡社の旧地が現在地の北側にあり、これの本体であった可能性も想定される。

## 2．円通庵遺跡

円通庵遺跡とされてきた所は江道集落の南東部に当たり、南東方向に派生してきた丘陵の先端部に位置する。南側には主要地方道高岡羽咋線が走り、ここに隠れ平坦地に石仏・石塔が散乱し、寺院跡とされてきた。ここより東側でやや高い所にも平坦地があり、塚状の高まりがある。

江戸時代の随筆家宮永正運が著した『越の下草』に円通庵のこととして、信光寺11世開達和尚の開基、往古の寺跡で仏像・梵字が彫られている、空海が建立したものである等のことが述べられている。

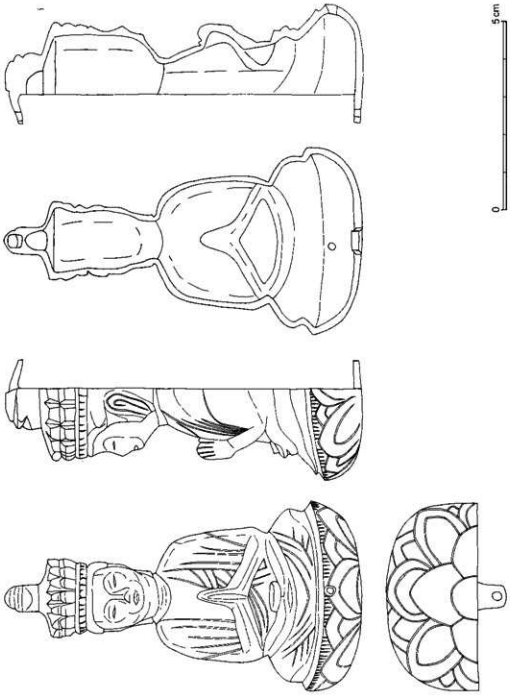
当地には、石仏、石塔が多数散乱している。これらは南北朝時代～江戸時代初頃のものである。石仏は阿弥陀仏、地蔵仏である。石塔は五輪塔の他、層塔や板石塔婆があり、注目される。磨崖の月輪が認められる。中心軸と環状の窪みを有するものである。月輪の中に墨書による梵字があった可能性があり、『越の下草』に言う梵字に関連するものかもしれない。石仏は載田石（石灰質シルト岩）が、石塔は岩崎石（石灰質軽石砂岩）が素材となっている。月輪はこの付近の基盤層である頭川層の一部、石灰質砂岩に穿たれている。

現在道路脇の崖面に穿たれた石龕内に石仏が一軀ある。阿弥陀如来立像である。他の石仏等と伴に散乱していたが、残存状態の最も良好なこの石仏を、昭和30年頃地元の人が当時の道路脇に石龕を掘り安置した。その後道路拡幅工事に伴い近くの寺院に仮置きされていたが、昭和52年に現在地に移設された。この阿弥陀仏は造り出しの方座及び光背を伴うもので、別石による台石（台座）の上に載っている。地元の人の話では、本体の方に枘が付き枘穴のある台石に付く形であるとされる。方座・光背を含む本体が高さ92cm、仏像が70cm、方座が５cmを計る。本体は載田石で台石は岩崎石である。鎌倉時代末～室町時代のものと推定される。良品であり当寺院跡の本尊であった可能性もある。

## 3．江道出土の金銅仏

『越の下草』に江道村の「観世音の黄金仏」（流布本）及び「観世音ノ金像」（稿本）として記載されている金銅仏である。『越の下草』では、元禄の頃、江道の名主が夢に現れた僧の霊告に従って当地で掘り出したものとされている。江道の水上家に伝わり、現在水上信好氏が所蔵されているものである。

この金銅仏は懸仏の千手観音座像である。光背や鏡板は存在せず蓮台上の尊像一体のみである。現在掘り出された当時に作られたとされる光背と台座に取り付けられて伝えられている。蓮台と座像を含めた全長は




第4図　江道出土の金銅仏実測図（実大）

9.4cmで、最大幅は蓮台にあり5.0cmを計る。頂部と蓮台下部には背面へ延びる枘出しが付き、鎹留め用の穿孔がそれぞれ付く。枘出しは0.75cmの長さである。蓮台の正面上部中央にも穿孔されている。枘出しを除いた奥行は頂部で1.9cm、蓮台で2.4cmを計る。尊像と蓮台とが一体となった薄い鋳造品で、高肉彫りである。正面の手は合掌手と宝鉢手の4臂である。蓮台には大きな蓮弁3枚の線刻があり、さらに各弁中にも線刻を施し計6弁となっている。鍍金は大部分剥落しているが、蓮台の底部等、残存している部分もある。

## 4．篠八口砦跡

『越中志徴』に記載されている砦跡である。男撲（おやどん）古墳群のある丘陵最高所より南西方向へ延びる尾根の頂部を中心とする所である。北西側の丘陵中腹は「殿様屋敷」と呼ばれている所である。また付近には平坦地もあり、建物址の所在地として可能な地域でもある。

## 5．境久寺遺跡

**はじめに**

広谷川の流れる谷部から北側へ派生する支谷にある遺跡である。小字から境久寺遺跡と命名した。ここで紹介するのは地元の山川正隆氏が採集された遺物である。図面1・2に実測図を示した。

**須恵器**（図面1－1101～1105）

1101は高台の付かない杯の底部である。底部はヘラ切りのままである。1102は高台付きの杯の底部である。高台部は下方へ延びる小さなものである。底部はヘラ切りのままである。1103・1104は杯の口縁部である。口縁部は外上方へ大きく開く形態である。1105は鉢形の器形と考えた。口端部は上方に端面を作っている。

**珠洲**（図面1－1106～1111）

1106は擂鉢の口縁・体部である。口縁部は端面をなし波状文が付く。オロシ目は密なものである。1107・1108は擂鉢の体下・底部である。1107は密なオロシ目が付く。1108はオロシ目は確認できないが、研磨されている。1109は壺の口縁部である。外上方へ短く延びた口縁部は肥厚して終っている。口径22cmを計る。1110は壺の底部とした。1111は甕の口縁部である。口径は約72cmである。

**青磁**（図面1－1112）

1112は高台付椀の体下・底部である。青緑色の薄い釉薬が、外底面と畳付以外に付く。見込みには印花が押されている。体部外面は残存部分が少なく不明確であるが、逆弁が刻まれていると推定される。外底面はヘラ削りされている。畳付は2次的に擦れている。

**砥石**（図面2－1201）

1201は珪質凝灰岩製の砥石である。長さ14.1cm、幅10.2cm、厚さ3.8cmを計る。長側面は大きい1面と小さい1面が使用面。両端面も使用面となっている。

**凹石**（図面2－1301）

1301は両面に凹を有する。一方の面には明確な凹が2箇所に付く。他方の面にはこれに比べてはっきりしたものではないが凹が1箇所に付く。安山岩製である。

# Ⅲ　石堤地区の遺跡

## 1．柴野の地蔵塚

主要地方道高岡羽咋線は、柴野集落の北東端を北西～南東方向に走り、広谷川のある谷部へと延びている。集落の中を走る道路がこの高岡羽咋線と交差する道路脇に、木製の小堂に納められた石仏、石塔がある。これらの石仏、石塔は集落に隣接する前田と言う所にあった「地蔵塚」より昭和初年に出土したものである。『石堤村誌』には「地蔵塚：前田岬にて今は田の中に残れり天文年間上杉謙信の攻め来るや頃ありて多くの地蔵尊を埋めたる処なりといふ」と記されている。石仏は阿弥陀仏数体である。石塔は五輪塔及び宝篋印塔多数である。南北朝時代～室町時代のもので、岩崎石製が主体である。地蔵塚は高さ約１m、一辺３～４m を計る塚であったとの話もある。地蔵塚の性格として、墓地、経塚、開発のために石仏等が集積された地点、街道と関連する施設等、多様なことが考えられる。

## 2．柴野の観音石仏

柴野集落の北西方約300mの地点、谷部の奥に位置する。背後は丘陵が迫っている。ここは守善寺と呼ばれている所である。石龕内の千手観音立像１軀であり、『越の下草』に記載されている。また『石堤村誌』『石堤村史資料』でも触れられている。この石仏については、高瀬重雄氏、木倉豊信氏が注目され、教示を受けた京田（藤原）良志氏が「天文二十一年“十六番山城国清水寺”在銘の観音石仏」として報告している。ここではこの報文に依りながら紹介しておく。

石仏は束首長方形の石材に中肉彫りしている。像容は岩座上に蓮華座をおき、その上に立つ。11面42臂の通常の千手観音である。石仏の刻銘は、左右両端の柱状部正面と一段下がった光背部にそれぞれ一行づつある。右下方は「十六番山城国清水寺」「奉造立観音立山寺」、左下方は「于時天文廿一年七月十日」「職恵一光道本禅定門」となる。銘文は、天文21年（1552）に職恵一光道本禅定門が、西国巡礼16番の清水寺観音勧請の意味を込めて、立山寺に建造した観音像と解釈できる。石仏の石材は、越前足羽郡の笏谷で取れるいわゆる笏谷石（越前石）である。このような遺品は越前特に朝倉氏の居城のあった一乗谷に多く、16世紀中葉のものである。よって当石仏は越前で作られた可能性が高い。石龕は扉板部材と身部材の２石からなる。扉板は正面から見ると唐破風の妻入りであるが、軒が側面や背面にも出る。身部は門型状に彫り貫いたものである。石材は岩崎石である。石龕は石仏に少し遅れて、段階製作されたものと考えられる。

この石仏の所在地は「カンジョウジ」「カンゼンジ」と呼ばれ「守善寺」「閑善寺」あるいは「閑禅寺」と言う寺跡とされている。また『越の下草』の「感成寺」や石仏銘の「立山寺」もある。このように数種類の名前が存在するが、元々一つの寺であったのか、数箇所の寺の存在を示しているのか、検討を要する。当地の南側一帯は、段状の平坦面となっている。戦時中の水田化による造作の影響もあるが、この谷間に寺院の堂舎が存在していた可能性がある。石仏銘の俗名「職恵」戒名「一光道本禅定門」と言う人物は、雄山神社新願殿所所蔵の仏鉢の銘文にも見える寺崎職恵である。石仏は、西国三十三箇所巡礼の展開に伴う石造化の遺品として貴重である。また越前との宗教・文化との関係が窺われ、興味深い。

## 3．柴野守善寺遺跡

「柴野の観音石仏」の前面の小さな谷一帯が遺跡である。守善寺堤から広谷川までの約250mに亘り、土師器、須恵器、珠洲の散布が見られる。遺物が細片のため時期の判別は難しいが、奈良時代以降中世に及ぶものとみられる。柴野の観音石仏や想定される寺院跡、柴野城ケ平城跡は、この谷を含んだ遺跡と考えられるので、この点でも興味深い遺跡である。

## 4．末窯跡

**はじめに**

この末窯跡については、西井龍儀氏が『西山丘陵埋蔵文化財分布調査概報Ⅲ』において報告しているところである。その後「シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題」においても述べられている。ここではこの報文に依りながら、遺物を中心に改めて紹介しておきたい。『西山丘陵埋蔵文化財分布調査概報Ⅲ』で図示されている資料は、西井氏が昭和60年以前に表面採集された資料に一部西広谷小学校所蔵資料を加えたものである。本書の図面３～10で図示した資料は、すべて西広谷小学校で所蔵されてきた資料である。

末窯跡は高岡市内で唯一の須恵器窯跡である。早くから注目されていたものである。昭和34年発行の「石堤村史資料」でも述べられている。昭和37年に作られた西広谷小学校の校歌にも「須恵の山から二上かけて・・・」と歌われている。昭和60年度に実施された分布調査事業により灰原が確認されたことでその存在が明確になった。また西広谷小学校所蔵の須恵器破片がこれとの対比によりこの窯跡出土のものであることが確定された。地番は西広谷字栂野であるが、付近に接して末坂の字がある。また一般的にスエ（末）と呼ばれてきた所でもある。

主要地方道高岡羽咋線は西広谷集落から勝木原集落にかけて北西方向へ走っている。この途中ここから派生する形で林道広地線が南西方向に延びて行く。この遺跡はこれらに挟まれた台地上に立地している。この台地には北東方向へ開く小支谷が入っている。ここの南側、すなわち小支谷の下流へ向かって右岸側に窯跡が位置している。ここには天池と呼ばれる小さな湧水池がある。この小支谷の北側一帯は牧場となっており、小支谷もほとんど埋まっているのが現状である。灰原は幅約20mの拡がりをもっており、窯体数は不明ながら、須恵器の散布状況から複数の窯跡の存在が指摘されている。確実な灰原は１箇所である。

**杯身**（図面３－2001～2032、図面４－2033～2060）

高台の付かないＡ類と高台の付くＢ類がある。杯Ａ類は形態及び技法よりＡａ類とＡｂ類に区分される。杯Ｂ類は法量よりＢⅠ類とＢⅡ類に区分される。

杯Ａａ類：口縁・体部がやや内寄して外上方へ開く形態で器高が浅いもの。体下部外面が押えられ底部が下方へやや突出した形となる。底部外面はヘラ切りのままで無調整である。この一群は主要なもので大多数を示すＡⅠａ類（2001～2025）とこれらに比べてやや小型で器高が深いＡⅡａ類（2026～2028）とに細分される。ＡⅡａ類は口径12cm以下であるのに対して、ＡⅠａ類は口径12cm以上のものがほとんどを占める。ＡⅠａ類としては小型で器高がやや深い2003とＡⅡａ類としては器高がやや浅い2028は両者の中間的なものと言える。ＡⅠａ類は器高が究めて浅く皿に近いものもあるが、比較的深いものと一線を引いて区別できず一つのものとした。総じて杯としては浅いものとして特徴のある一群と捉えたい。

杯Ａｂ類：口縁・体部が内弯して外上方へ拡がる形態で器高が深いもの。底部外面は糸切りのままで無調整である。2029～2032の４点が該当する。2029～2031の３点は類似する形態である。法量は違いそれぞれ口径14.0、12.0、12.9cmを計る。2032は口縁・体部が大きく外上方へ開く。小破片であり本来の形態であるかどうかは不明である。

杯ＢⅠ類：口縁・体部が直線的に外上方へ拡がる形態。器高が深く椀形である。底部外面はヘラ切りのままで無調整である。これらの中で小型の一群である、2043～2045が該当する。2041と2042は後述のＢⅡ類との中間の大きさになると推定される。2042の底部内面はヘラ磨きされている。

杯ＢⅡ類：口縁・体部が直線的に外上方へ拡がる形態。器高が深く椀形である。底部外面はヘラ切りのままで無調整である。これらの中で大型の一群である、2033～2040が該当する。本来の形態と推定される状態で全体が判明するのは2033と2036ぐらいである。2033もゆがんでいる。実測図の断面が白ヌキの部分はゆがんでいると判断したラインである。2034、2035、2037の断面にアミがかけてある部分は想定復原したラインである。

杯口縁・体部：器高が深いものである2046～2048と器高が浅い2049・2050である。前者は杯Ａｂ類か杯ＢⅡ類の口縁・体部と推定される。後者は杯ＡⅠａ類の口縁・体部と断定してよかろう。2049の内面はヘラ磨きされている。

杯底部：底部外面をヘラ切りしている2051～2053と底部外面を糸切りしている2054～2060である。両者とも切り離し後は無調整である。2051～2053は杯ＡⅠａ類の底部と断定してよかろう。糸切りの底部である2054～2060については、杯Ａｂ類の底部の可能性が高い。ただし後述の皿Ａａ類の底部になる可能性も残されている。

**杯蓋**（図面５－2061～2070）

杯類の蓋としたもので、2061～2070の10点図示した。全体の形態が判明するものは2062・2063の２点である。つまみの有無については、偏平な宝珠形のつまみが付く2061とつまみが付かず天井部がヘラ切りのままである2062・2063がある。口縁部の法量からは、口径が20.5cm前後を計る2064・2065と、口径が14.5cm以下の2062・2063・2066～2070とに区分される。口縁部の形態は外方へ延びた後、下方へ短く折れ曲がるものとなっている。

**皿**（図面５－2071～2093）

高台の付かないＡ類と高台の付くＢ類がある。皿Ａ類は形態よりＡａ類とＡｂ類に区分される。皿Ｂ類は高台の形態によりＢａ類、Ｂｂ類、Ｂｃ類に３区分される。

皿Ａａ類：口縁部が外反して外上方へ延び、口端部が外方や外下方へ開く。底部外面は糸切りのままで無調整である。Ａ類の中では主体を占めるものであり、2071～2078である。2075～2078は口端部が欠損しているが、この形態になるものと判断した。2072は底部外周をヘラ削りしている。2075は底部糸切りの後に２次的にナデられている。

皿Ａｂ類：高台の付かない皿の内、Ａａ類としたもの以外を一括してこれに含めた。Ａａ類に比べて少数で、2079～2081である。口縁部が外反しないことと口径に対する底径の割り合いが比較的大きいことに特徴がある。2079は口縁部が直線的に外上方へ拡がる。底部外面は糸切りである。2080は杯Ａａ類と類似している。ここから分離したのは、口縁部が直線的に外上方へ拡がることと口径に対する底径の割り合いが大きいことからである。底部外面はヘラ切りである。2081は歪んでいて本来の形態が不明確である。皿としたものの中では大型品であり、底部外面はヘラ切りである。口縁部が内弯して外上方へ拡がるものとした場合、口

径14.6cm、底径11.6cmとなり、口径に対する底径の割り合いが大きいものとなる。口縁部が直線的に外上方へ開くものとした場合、口径16.6cmを計る大型の皿となる。なお、この2081は他のものと総体的に様相を異にし、末窯跡出土品ではないものの可能性がある。

皿Ｂａ類：口縁部が外反して外上方へ延び、口端部が外方や外下方へ開く。底部外面は糸切りのままで無調整である。高台部は短く下方へ延びる通有のものである。高台の付く皿では土体を占めるもので、2082～2087である。2082の底部外面は２次的にナデられている。2082の口縁・底部内面と2083の底部内面はヘラ磨きされている。

皿Ｂｂ類：細く小さな高台が付く形態である。2088は全体の形態が判明するものである。口縁部が外反して外上方へ延び、口端部が外方へ開く。底部は糸切りのままで無調整である。2089は口縁部を欠損しているが、2088と同様な形態と推定した。底部は糸切りをして外周を２次的にナデている。

皿Ｂｃ類：足高高台の皿、2090である。口縁部は、外反して外上方へ開く。高台部は外下方へ延びる足の長いものである。底部は糸切りのままで無調整である。

皿口縁部：外反して外上方へ拡がる口縁部で2091～2093の３点である。皿Ａａ類か皿Ｂ類に含まれる口縁部である。2092・2093は高台の付く可能性があり、Ｂ類に含まれるものと推定される。

**鉢**（図面６－2094・2095）

鉢の口縁部である2094・2095である。ほぼ水平な口端面をなした後、内下方へ内弯して延びる。

**瓶**（図面６－2102～2110・2114～2116、図面７－2096～2101・2111～2113）

瓶類の破片である。全体の形態が判明するものは存在しないが、器形としては双耳瓶が確認できる。また小型の瓶もある。

双耳瓶：耳部が確認でき双耳瓶としたもので、2096～2101である。口縁部から胴上部・耳部までが確認できるのが2096である。胴上部・耳部から底部までが確認できるのが2101である。残りの2097～2100の４点は胴上部・耳部を中心とした破片である。

小瓶：全体の形態が判明しないが、小型の瓶類であることは確実である。2102～2104の３点である。2102は肩部～胴上部片、2103は胴中央部片、2104は胴下半部片と考えられる。

瓶口縁部：瓶の口縁部で、2105～2110である。口縁部は外反して外上方へ延びた後、外方へ開き上下に肥厚して口端面を形成する。口径は10.8～13.8cmを計る。双耳瓶の口縁部と考えられる。

瓶底部：瓶の底部である。高台の付かない2111～2113と高台の付く2114～2116である。2111～2113は双耳瓶の底部と考えられる。

**甕**（図面８－2117～2126、図面９－2127～2131、図面10－2132～2139）

長胴甕と中・大型の広口甕がある。

長胴甕：胴部が長くなる長胴の甕としたもので、2117～2126である。口縁・胴上部の破片であることと歪んでいるため形態を明確に捉えることができないが、胴部はドぶくらみになるようである。口縁部はくの字状に折れた後、内上方へ屈曲する。この屈曲は外反して内上方へ屈曲するものが多い。口径は15.7～28.2cmを計る。胴上部外面にはカキ目による調整を施している。カキ目の開始位置は、頸部直下から施すものと胴中央部近くから施すものとの２種類がある。

広口甕：一応広口甕と表現したものである。中型の甕である2127・2128と大型の甕である2129～2131がある。2127は口縁部を欠損している。2128は口縁部がやや外傾して延びた後、外反して外上方へ拡がり、口端部は上下に肥厚する。口径26.5cmを計る。この２点の胴上部は、内面があて具痕、外面が叩目である。2129

～2131の３点で口径が判明するのは38.0㎝を計る2129のみである。2130・2131は小破片のため口径を割り出すには耐えないが、2129に比べて大型の甕になることは確実である。これらは口縁部が外反して外上方へ開き、口端部は上下に肥厚する。下方へは比較的大きく垂下する。

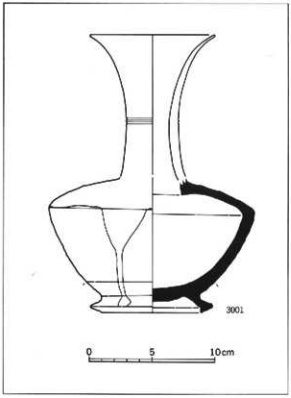
**甕胴部**：甕の胴部片で、2132～2139である。広口甕としたものの胴部片と推定している。

**鍋**（図面９－2140・2141）

鍋口縁部：口縁部のみの小破片ではあるが、大きさや傾きより鍋とした。2140・2141である。2140は屈曲して外上方へ拡がる口端部となる。口径39.6㎝である。2141は内上方へ折れ曲がって終わる口端部となる。小破片のため口径は不確実だが45.0㎝となる。

## ５．西広谷小学校の長頸瓶

第５図－3001。西広谷小学校に所蔵されている須恵器長頸瓶である。口頸部が欠損しており、胴・底部のみ残存している。口頸部が長く外上方へ延びるものと考え、長頸瓶とした。肩部が張り、高台部は外下方へ踏ん張るものである。残存器高10.7㎝、胴部最大幅は上部にきて16.3㎝を計る。胴中央・下部外面は横ナデされている。底部外面は２次的にナデられている。肩部には濃緑色自然釉が付く。色調は赤灰色である。焼成は良好で賢緻である。




第５図　西広谷小学校の長頸瓶実測図（１／３）

第６図　西広谷小学校の長頸瓶

# Ⅳ 結　語

本書で取り上げたものは10個の歴史資料である。旧村域による区分では国吉地区と石境地区とに分かれるが、広谷川流域のものであると言うことでは一致している。時期的には、平安時代から戦国時代頃のものが主要なものである。ただし、この地域には縄文時代以来、さまざまな遺跡、遺物がみられる所である。

釈迦堂遺跡と円通庵遺跡は、現在明確な歴史資料としては、石仏・石塔が中心である。中世に寺院が存在し、これを示しているのが石仏・石塔であると理解される。石仏が鎌倉時代末頃まで遡るものであることから、14世紀代には始まる寺院跡と言えよう。両者は至近の位置にあり関連している遺跡と推定される。石仏・石塔がある地点を中心に周囲を遺跡（埋蔵文化財包蔵地）としてよいものである。

江道出土の金銅仏は頭上に刻みを入れ、11の小区画を設けている。11個の小面を表現しているものと理解される。従来十一面観音座像で鎌倉時代のものとされてきた。今回、体正面の４臂以外の手は木体と別造りとし本来存在していたものと考えた。それで千手観音座像とした。時期的には鎌倉時代後期頃のものと思われる。

江道出土の金銅仏は、明確な出土地点は判明していない。状況より江道地区からの出土は疑い得ないものと思う。円通庵遺跡を狭い範囲に固定せず、ここを中心に仏教的施設が点在したことを考慮すれば、広い意味での円通庵遺跡との関連が十分に想定されるものである。

『越の下草』には円通庵遺跡について、寺院の建立や仏像についてのことと共に、梵字を彫付たことが記されている。寺院については当地に寺院が存在していたと推定されるものであり、仏像については石仏が存在している。問題になるのは梵字である。これについては廟堂の月輪との関連を指摘したい。月輪の中に刻まれたか、あるいは墨書されていたとし、この月輪や梵字を種子マンダラとするものである。『越の下草』の記者は当時この梵字を直接見たか、伝聞したものであろうが、現在は風化が進み確認できない。

柴野の観音石仏もこの石仏のある地点のみではなく、もっと広域に考える必要がある。この石仏のある谷部は柴野宇善寺遺跡として、以前より遺跡となっているので、埋蔵文化財包蔵地としては、この石仏のある地点も柴野宇善寺遺跡として一体のものと捉えておく。

柴野の地蔵塚は、石仏・石塔が原位置より移されている。往時の場所については、柴野遺跡に含まれているので、この柴野遺跡を地蔵塚を含んだものと捉えておく。この地蔵塚では敷田石製のものが多い。砂岩石製のものが多い釈迦堂遺跡とは対照的である。

末窯跡出土資料については、今回報告した西広谷小学校に所蔵されている資料が最もまとまったものである。昭和60年の踏査の時採集された資料や、これ以外の時期に採集された資料もあるが、少量である。この窯跡は磯波郡域の中でも最も北側に位置するものである。また他の窯跡群から離れている。時期については９世紀後半～10世紀初頃、特に９世紀末頃を中心に考えておきたい。

篠八口砦跡については、以前の分布調査の報告では埋蔵文化財包蔵地から漏れていたものである。境久寺遺跡出土資料については、鎌倉時代後半から南北朝時代頃の遺物が主体を占めている。

現在西広谷小学校には末窯跡出土須恵器の他、校区内の各所から出土した遺物が所蔵されている。今回紹介した須恵器長頸瓶もこの一つである。これについては江道横穴墓群から出土したとされるものに類似しており、同一のものである可能性がある。

**参考文献**


石田茂作他　1964　『垂迹美術』　角川書店

大野文郷他　1985　『富山県高岡市西山丘陵埋蔵文化財分布調査概報Ⅱ』　高岡市教育委員会

大野文郷他　1986　『富山県高岡市西山丘陵埋蔵文化財分布調査概報Ⅲ』　高岡市教育委員会

京谷　準　1966　『国吉小史』　国吉小史刊行委員会

京田　良志　1976　『富山の石造美術』　巧玄出版

窪城　知平　1917　『石堤村誌』　石堤村役場

小島俊彰他　1967　『勝木原遺跡Ⅰ』　高岡工芸高等学校地理歴史クラブ

坂井誠一他　1974　『角川日本地名大辞典16－富山県』　角川書店

高瀬重雄他　1957　『高岡市江道横穴古墳群調査報告書』　高岡市史料編纂委員会

高瀬重雄他　1994　『日本歴史地名大系第11巻　富山県の地名』　平凡社

樽谷雅好他　1979　『高岡の伝承』　高岡市教育委員会

雅波田　徹　1990　『鏡像と懸仏』（日本の美術No.284）　至文堂

西井　龍儀　1988　「小矢部川左岸における須恵器生産開始期の検討」『両越地域史研究』創刊号　両越古代・中世史研究会

西井　龍儀　1988　「越中－砺波郡の概略」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題、資料編』　石川考古学研究会・北陸古代土器研究会

藤田富士夫　1983　『日本の古代遺跡13－富山』　保育社

藤原　良志　1967　「天文二十一年“十六番山城国清水寺”在銘の銅斉石仏」『富山史壇』第36号　越中史壇会

古岡英明他　1991　『たかおか歴史との出会い』　高岡市

逸見　護　1982　『昭和56年度高岡市埋蔵文化財調査報告書』　高岡市教育委員会

逸見　護他　1983　『昭和57年度高岡市埋蔵文化財調査概報』　高岡市教育委員会

湊　晨他　1972　『富山県史－考古編』　富山県

宮崎精二他　1959　『石堤村史資料』　石堤公民館

宮永　正運　1980　『越の下草』　富山県郷土史会

山森昌寅他　1989　『歴史の散歩みち』　三千坊山を中心とした西山を愛する会

要藤昭夫他　1992　『百年のあゆみ　創校百周年記念誌』　高岡市立西広谷小学校

和田　一郎　1959　『高岡市史－上巻』　青林書院新社

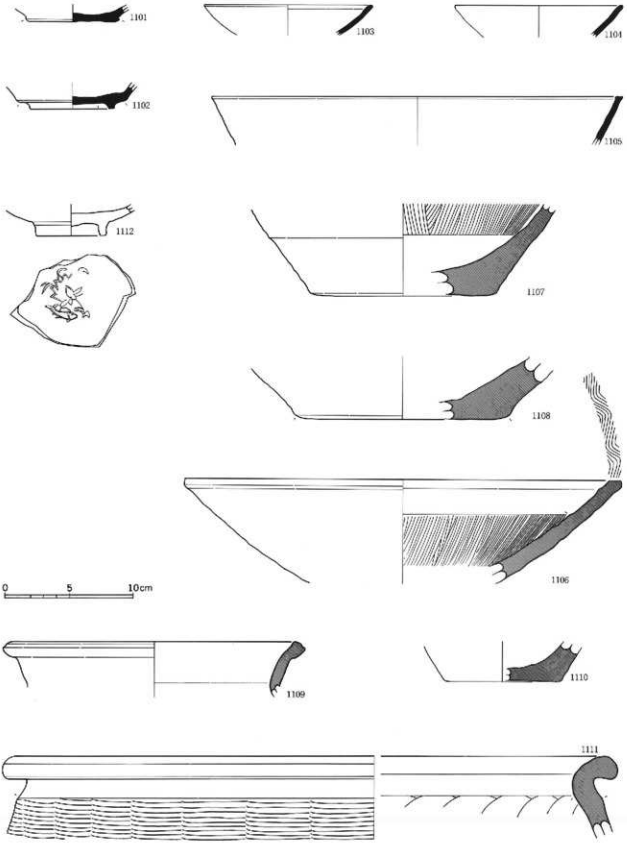
富山県教育委員会　1972　『富山県遺跡地図』

富山県教育委員会　1993　『富山県埋蔵文化財包蔵地地図』


**調査参加者名簿（整理）**

磯部夏子、上田順子、大田欣和、岡田一広、小田紀子、折忠美子、川田純子、小林央、新谷晴紀子、高木麻里
高田えみ子、寺井久子、道谷美奈子、長谷川清美、舗薫、水見留子、藤井美紀、船木悦子、放生千絵、堀田委月子
牧田里恵、三島幸代、宮下真知子、明前雅江、村上みのり、山田恵

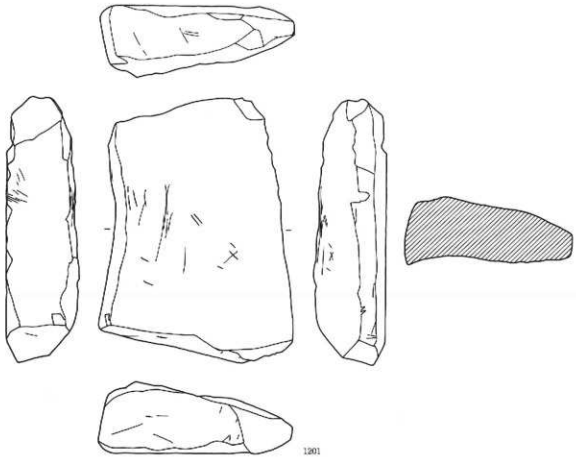
図　　面

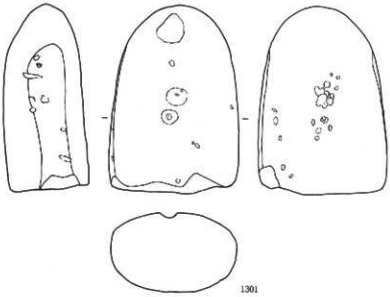



境久寺遺跡　須恵器：1101～1105，珠洲：1106～1111，青磁：1112

縮尺 1／3

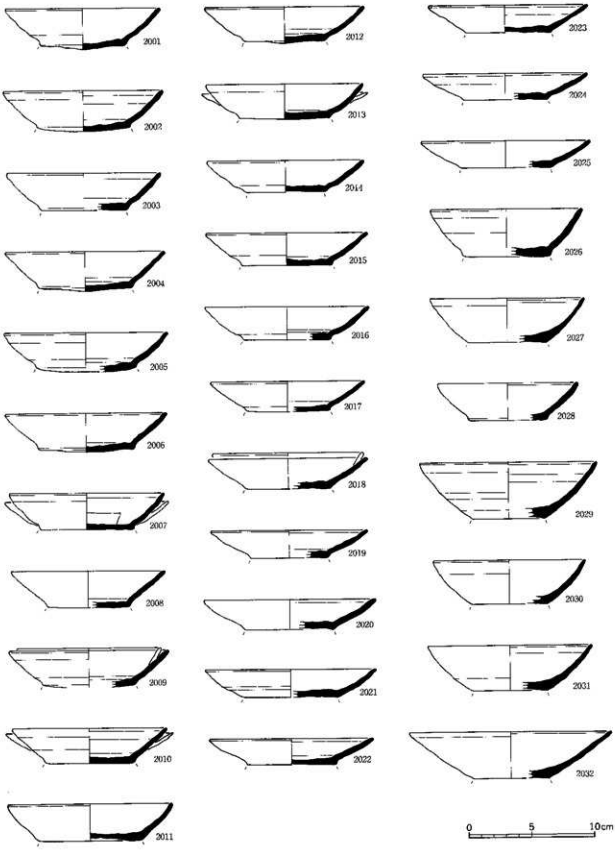
図面二　遺物実測図



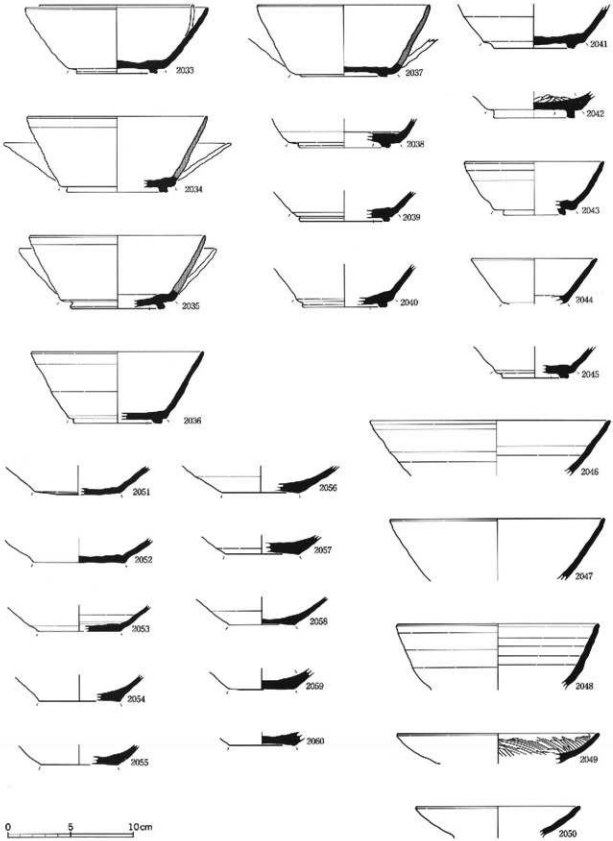
境久寺遺跡　砥石：1201，凹石：1301

縮尺1／2


2001
2002
2003
2004
2005
2006
2007
2008
2009
2010
2011
2012
2013
2014
2015
2016
2017
2018
2019
2020
2021
2022
2023
2024
2025
2026
2027
2028
2029
2030
2031
2032
0
5
10cm

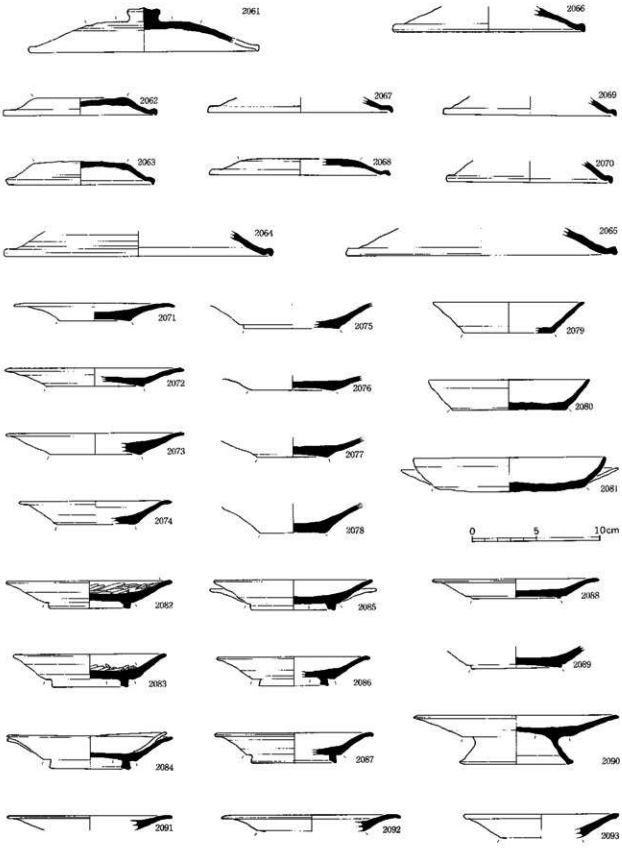
木窯跡　須恵器

縮尺 1／3


2033
2034
2035
2036
2037
2038
2039
2040
2041
2042
2043
2044
2045
2046
2047
2048
2049
2050
2051
2052
2053
2054
2055
2056
2057
2058
2059
2060
0
5
10cm

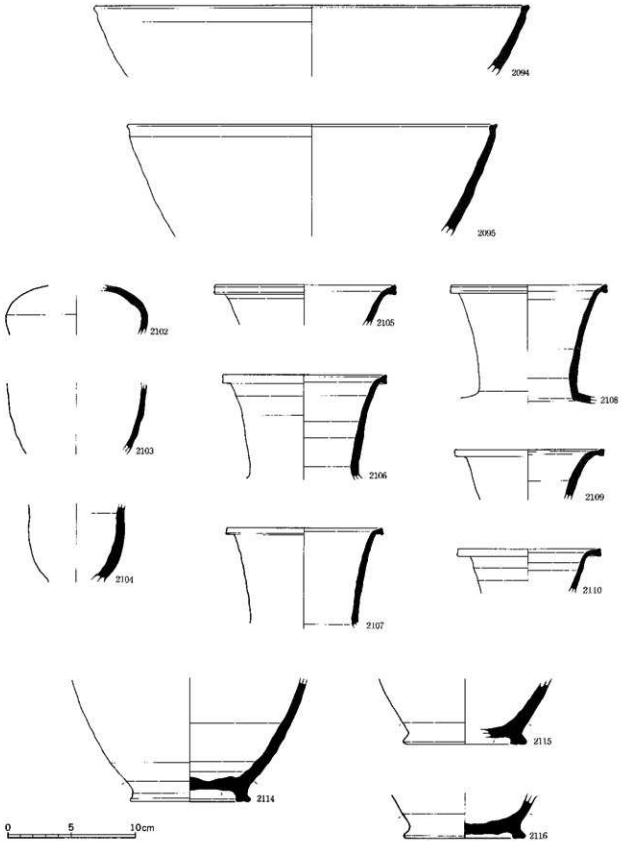
末廣跡　須恵器

縮尺1／3


2061
2066
2062
2067
2069
2063
2068
2070
2064
2065
2071
2075
2079
2072
2076
2080
2073
2077
2081
2074
2078
0
5
10cm
2082
2085
2088
2083
2086
2089
2084
2087
2090
2091
2092
2093

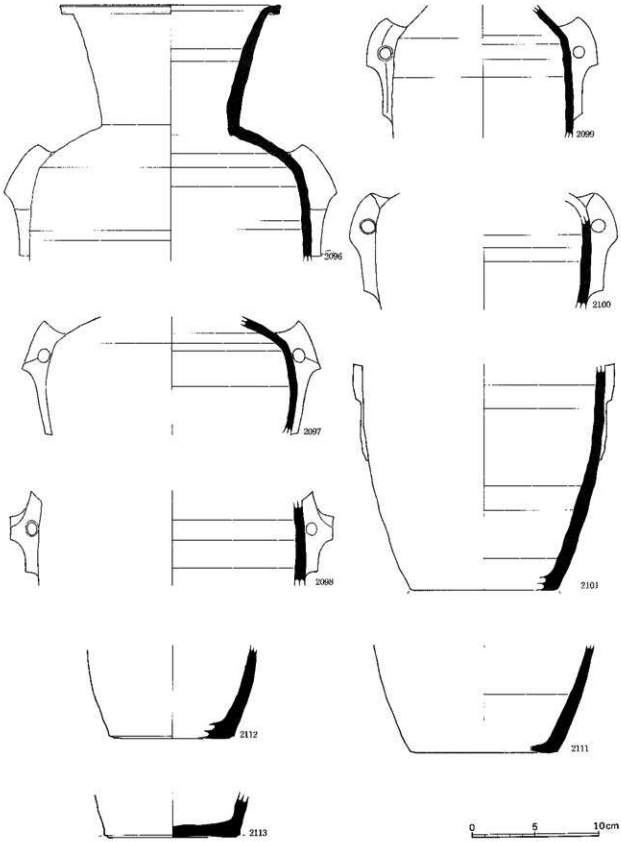
末窯跡　須恵器

縮尺1／3


2094
2095
2102
2103
2104
2105
2106
2107
2108
2109
2110
2114
2115
2116
0
5
10cm

末廣跡　須恵器

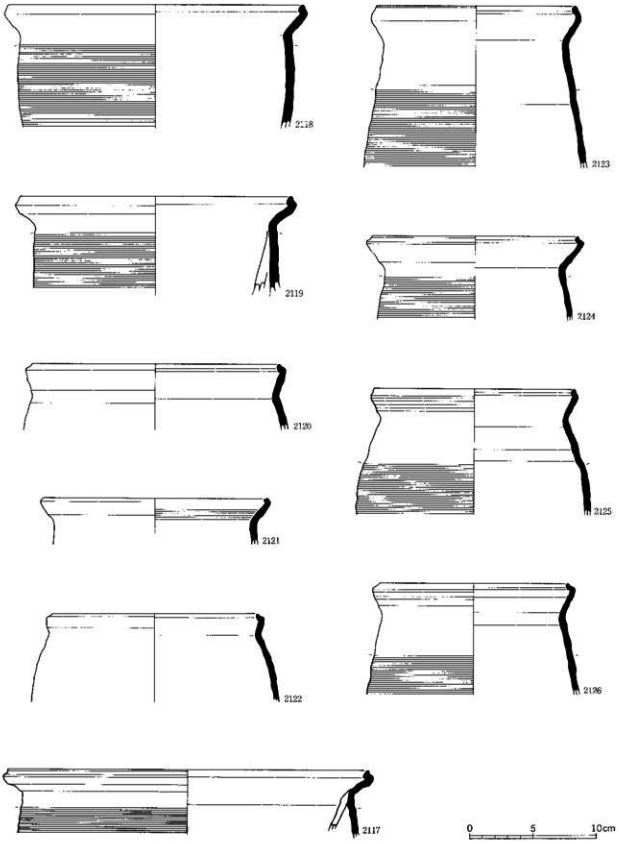
縮尺１／３




未調査　須恵器

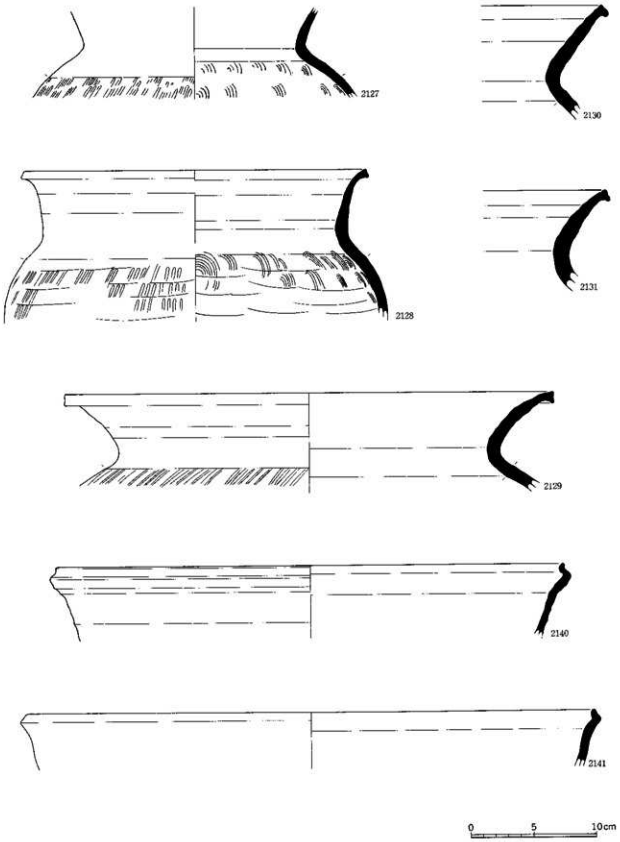
縮尺１／３

図面八　遺物実測図



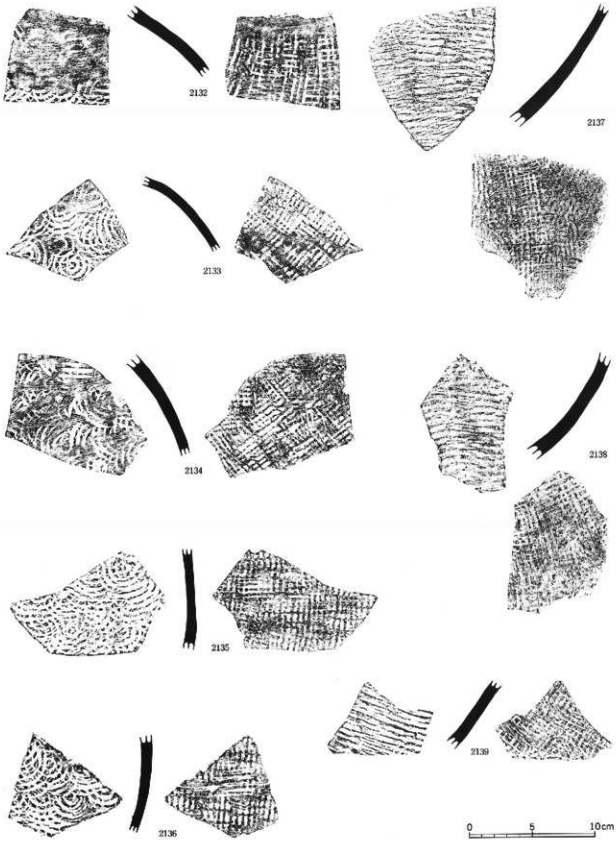

末窯跡　須恵器

縮尺1／3




末窯跡　須恵器

縮尺1／3




末窯跡　須恵器

縮尺1／3

# 図　　版

## 遺跡写真撮映年一覧

図版1　遺跡　1．円通庵遺跡（平成2年）
　　2．円通庵遺跡（昭和63年）
図版3　遺跡　1．笹八口周辺（平成11年）
　　2．笹八口周辺（平成11年）
図版4　遺跡　1．釈迦堂遺跡（昭和63年）
　　2．釈迦堂遺跡（昭和63年）
図版5　遺跡　1．釈迦堂遺跡（昭和63年）
　　2．釈迦堂遺跡（昭和63年）
図版6　遺跡　1．円通庵遺跡（平成2年）
　　2．円通庵遺跡（平成3年）
図版7　遺跡　1．円通庵遺跡（平成2年）
　　2．円通庵遺跡（平成2年）
図版8　遺跡　1．円通庵遺跡（昭和31年）
　　2．円通庵遺跡（平成2年）
図版9　遺跡　1．円通庵遺跡（昭和31年）
　　2．円通庵遺跡（昭和55年）
図版10　遺跡　1．柴野の地蔵塚（昭和63年）
　　2．柴野の地蔵塚（昭和63年）
図版11　遺跡　1．柴野の観音石仏（昭和41年）
　　2．柴野の観音石仏（昭和41年）
図版12　遺跡　1．柴野の観音石仏（昭和41年）
　　2．柴野の観音石仏（昭和41年）
図版13　遺跡　1．末窯跡（平成11年）
　　2．末窯跡（平成11年）
図版14　遺跡　1．調査風景（昭和63年）
　　2．調査風景（昭和63年）

1．円通庵遺跡、石仏と月輪

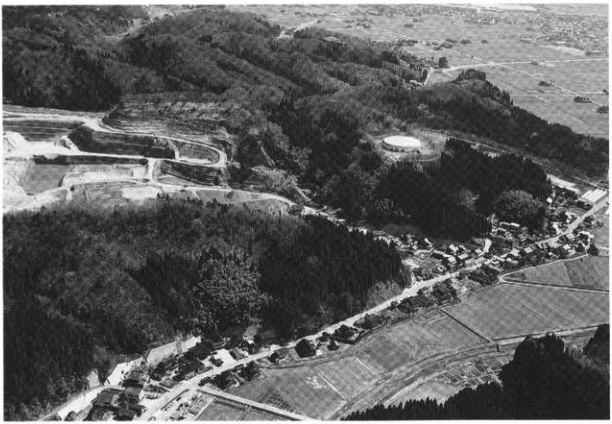
2．円通庵遺跡、磨崖の月輪

1．江道出土の
金銅仏、側面

2．江道出土の
金銅仏、正面

図版Ⅱ　銅仏

1．笹八口周辺



2．笹八口周辺

1．釈迦堂遺跡、石龕と石塔

2．釈迦堂遺跡、石龕と石塔

1．釈迦堂遺跡、石仏近景

2．釈迦堂遺跡、石祠付近

1．円通庵遺跡、石仏と現在の墓

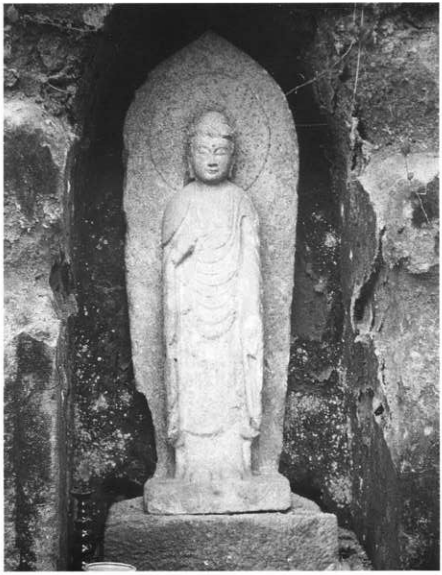
2．円通庵遺跡、石仏と月輪

1．円通庵遺跡、石仏と石塔

2．円通庵遺跡、石龕

1．円通庵遺跡、
移設された石仏

2．円通庵遺跡、
移設された石仏

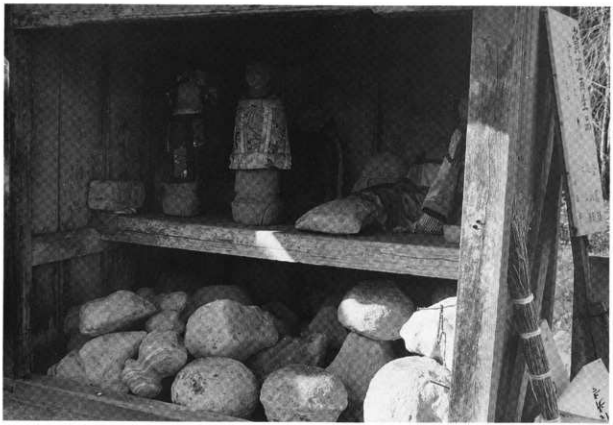


1．円通庵遺跡、移設された石仏

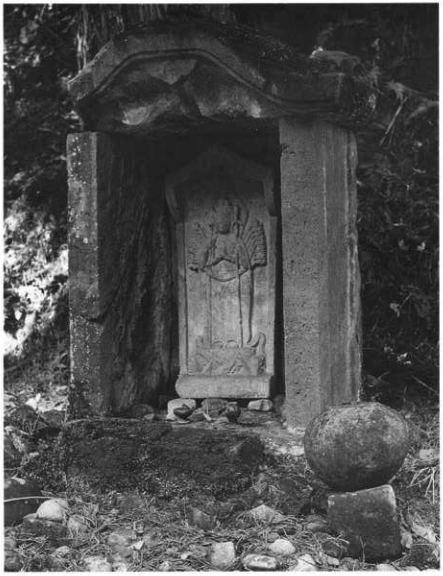
2．円通庵遺跡、移設された石仏

図版14 遺跡

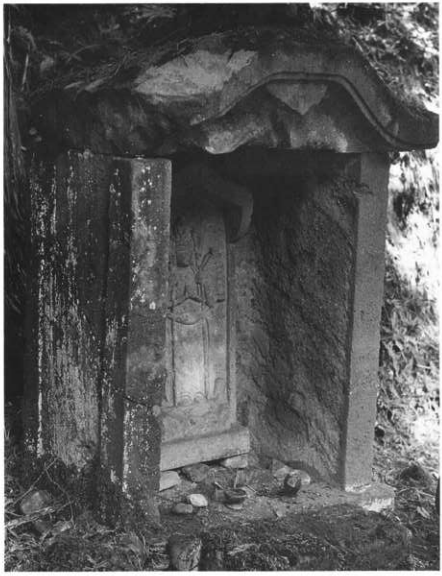
1．柴野の地蔵塚、小堂の中の石仏等



2．柴野の地蔵塚、石仏と石塔



1．柴野の観音石仏、石龕の中の石仏



2．柴野の観音石仏、石龕の中の石仏

1．柴野の観音石仏、
石仏近景

2．柴野の観音石仏、
石龕遠景

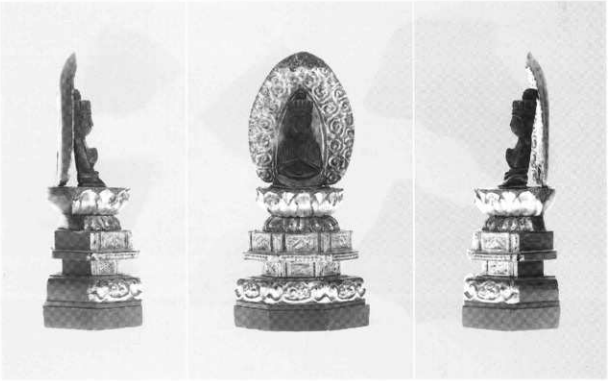
1．末窟跡

2．末窟跡

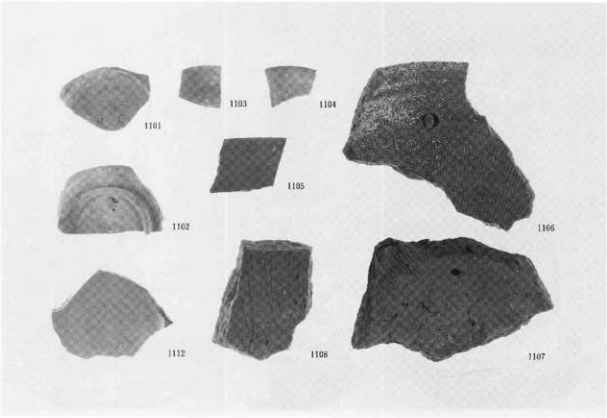
1．調査風景、円通庵遺跡

2．調査風景、柴野の地蔵堂

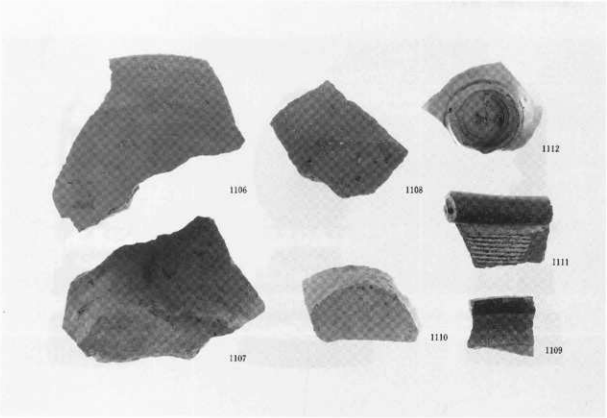
1．江道出土の金銅仏、約実大



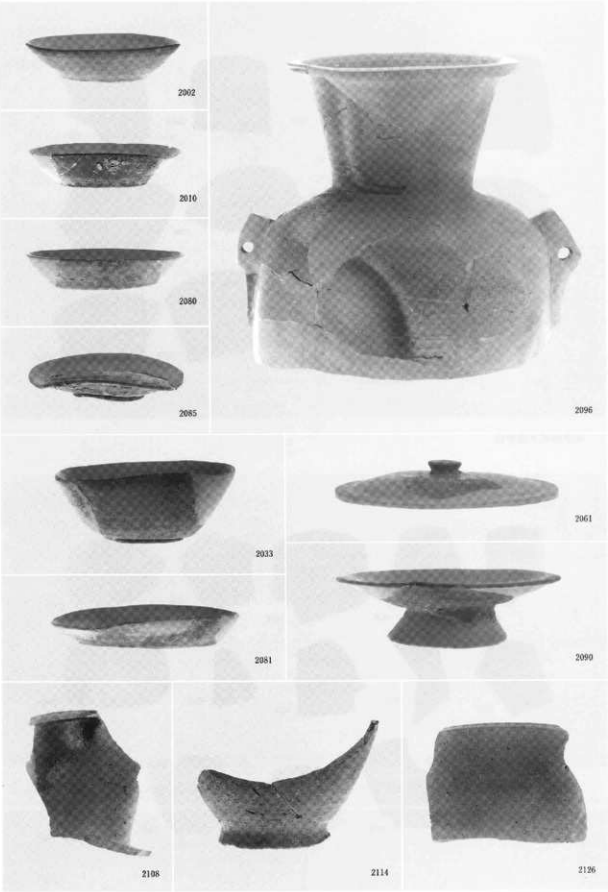
2．江道出土の金銅仏、木製の台座付、縮尺約３分の１



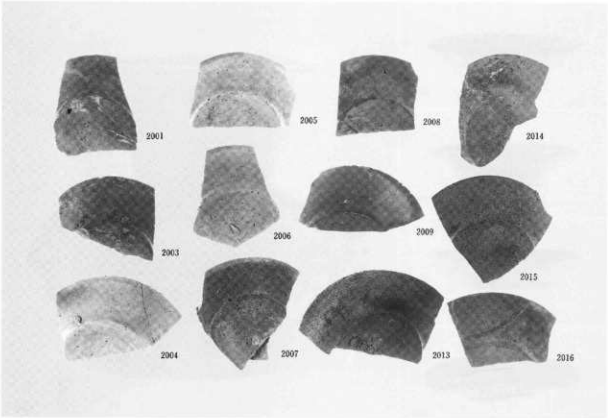

1．境久寺遺跡出土土器類



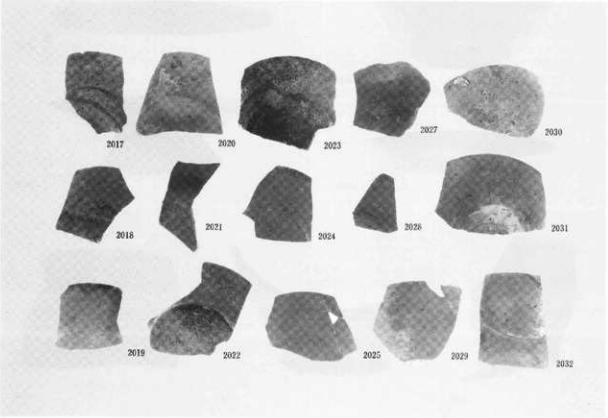

2．境久寺遺跡出土土器類



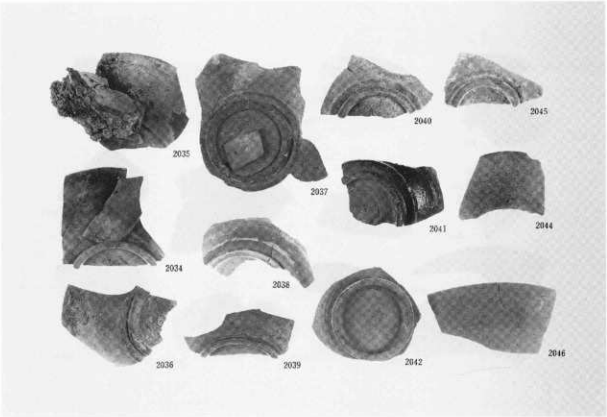

末窯跡出土須恵器



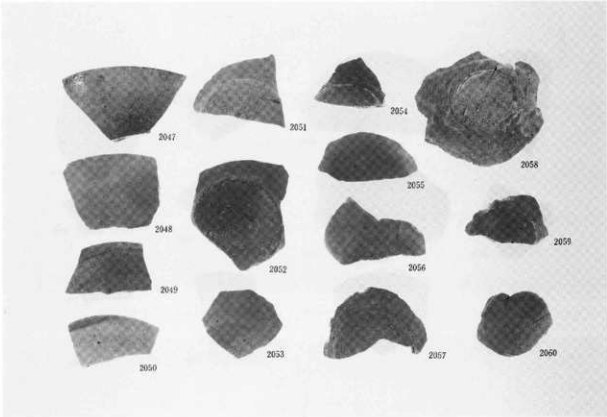

1．末窯跡出土須恵器



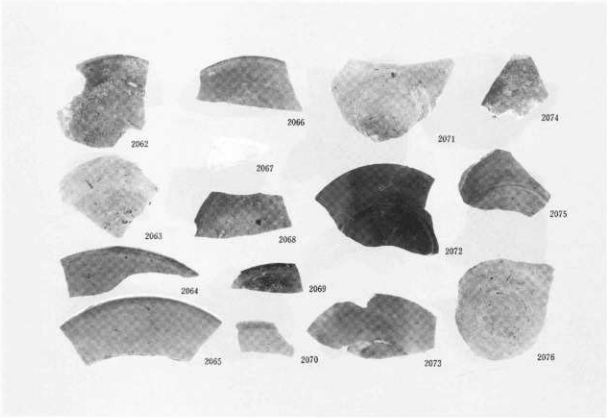

2．末窯跡出土須恵器



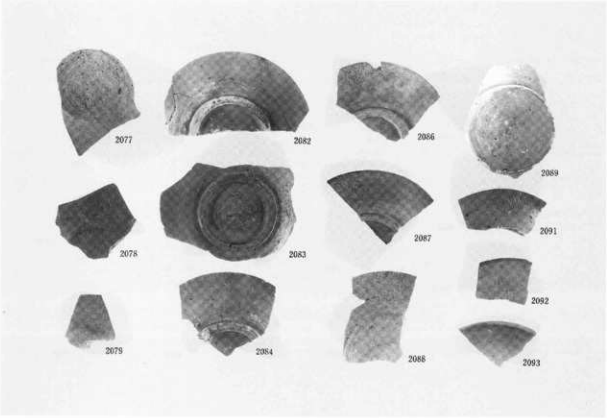

1．末窯跡出土須恵器



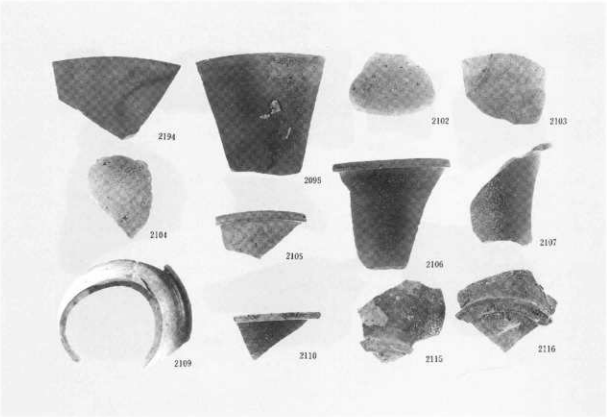

2．末窯跡出土須恵器



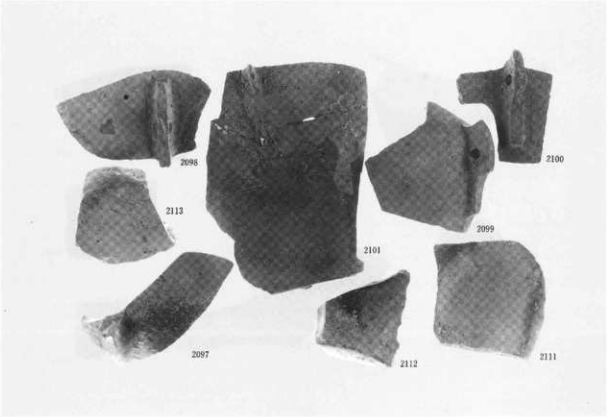

1．末窯跡出土須恵器



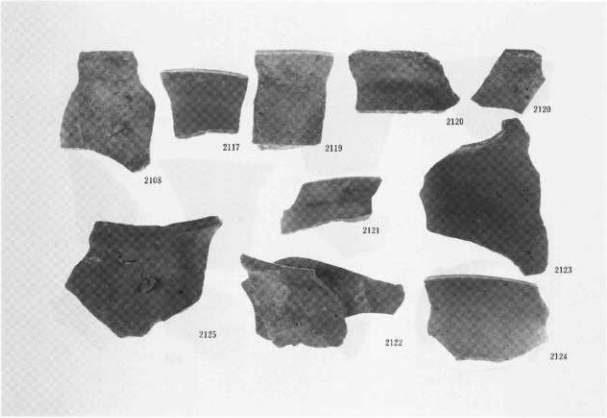

2．末窯跡出土須恵器



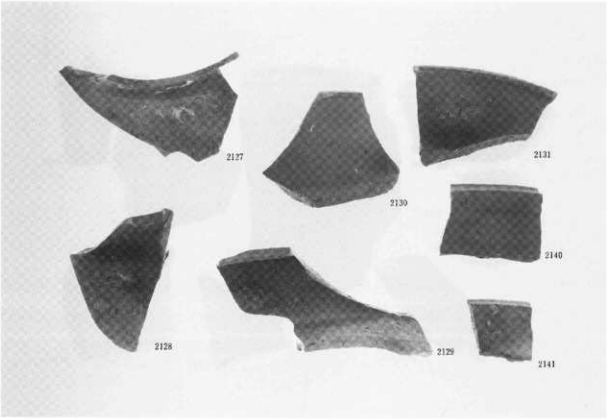

1．末窯跡出土須恵器




2．末窯跡出土須恵器




1．末窯跡出土須恵器




2．末窯跡出土須恵器

高岡市埋蔵文化財調査概報第44冊

国吉・石堤地区の遺跡調査概報

発行者　高岡市教育委員会
富山県高岡市広小路７番50号

1999年３月31日

印刷所　小間印刷株式会社
富山県高岡市利屋町３